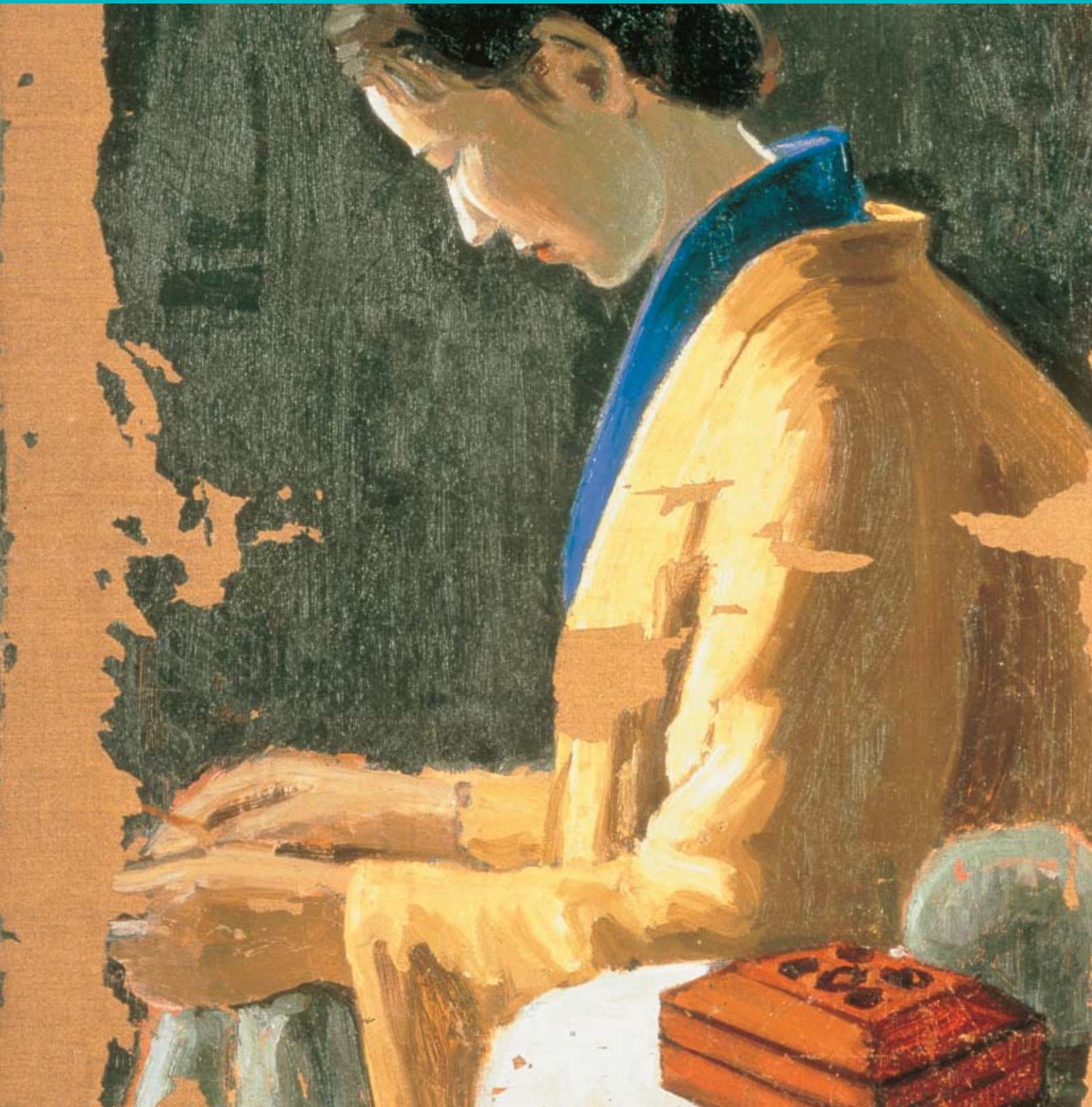


だ  
よ  
り  
美  
術  
館

Contents

無言館 遺された絵画展	[2~5]
平成16年度新収蔵品紹介	[6~7]
お知らせ	[8]
共催展・移動美術館展情報	[8]
貸館情報	[8]
日本まんなか共和国	[8]

〈表紙:興梠 武「編みものする婦人」(部分)〉



# 無言館 遺された絵画展

の  
こ

戦後六〇年特別企画

平成17(2005)年は終戦から60年になります。

戦争中、画家になることを夢み、

生きて帰って絵を描きたいと叫びながら死んでいった  
一群の画学生たちがいました。

「無言館」は、そうした

若き画家たちがのこし、遺族たちが守り続けてきた  
作品と遺品の数々が収められた美術館です。

青春の輝き、戦争の無念、恋人への想い――。

本展は「無言館」に遺された作品や遺品、手紙を通して  
《命》に出会う展覧会です。

講演会 ● ※聴講無料

「無言館」のこと 一生と死の画家たち――  
窪島 誠一郎 氏 (無言館・信濃デッサン館館主)  
5月15日(日) 14時～ 美術館講堂にて

学芸員による解説会 ● ※本展チケットが必要です

5月14日(土)、22(日) 14時～15時

同時開催 ● ※本展チケットにてご覧いただけます

テーマ展「平成16年度新収蔵品紹介」



「無言館」外観

2005年4月29日(金)～ 5月29日(日)

休館日 5月16日(月)、23日(月)

開館時間 9時～17時(毎週金曜日は20時まで開館) ※入場は閉館30分前まで

入場料 一般800円 大・高生500円 小・中生300円 ※30名以上の団体は2割引

会場 福井県立美術館

主催 福井県立美術館、戦没画学生慰霊美術館「無言館」、NHK中部ブレインズ

後援 福井新聞社、NHK福井放送局

企画協力 NHK きんきメディアプラン

一度だけでいい、あなたに見せたい絵がある――。

「あゝ、こんなに傷んじゃって…」  
もうすぐ七〇歳になる佳子さんは、  
戦死した武さんの体を拭くように、  
絵の上の埃をそっとはらった。



興梧 武「編みものする婦人」



曾宮俊一「風景」

達者か… 早く帰ってこい… おまえには芸術があるぞ…。

## 戦

没画学生慰霊美術館「無言館」（長野県上田市）は、画学生たちが遺した作品と、生前の彼らの青春の息吹を伝える遺品の数々を末永く保存・展示し、今を生きる私たちの精神の糧にしてゆきたいという画家・野見山暁治氏（昭和18年東京美術学校卒・東京芸大名誉教授）の積年の希いをもとに、平成9年「信濃デッサン館」の館主・窪島誠一郎氏が、その分館として全国3000余名にもおよぶ協力者の芳志により開館したものです。また、無言館がオープンしてからその活動に賛同する新たな戦没画学生の遺族による作品の寄託希望が相次ぎ、その数は600点を超えるまでになりました。絵を預けながら展示スペースの関係で未だ展示されていない遺作も数多くあります。

本展はそれら収蔵作品の中から未公開の作品を中心に、他館の戦没画学生の収蔵作品も併せ、58名の約130点の日本画・油彩・彫刻などの遺作と遺品資料を展示します。

遺された絵画展

あと五分、あと十分この絵をかか  
せな  
りませ  
ん。絵  
をか  
くた  
めに

## 「無言館」

この名前は、どのような意味を持っているのでしょうか。館主の窪島誠一郎さんは語ります。「かれらの描く絵はことごとく深い静寂にまつまれている。この静寂を無言と解釈することは簡単です。」「しかし、無言ということからいえば、無言のまま立ちすくむしかないのは、今を生きる我々のほうなのではないでしょうか」と。

1997年5月2日、信州・上田市郊外の丘に戦没画学生慰霊美術館「無言館」が開館して8年がたちます。東京美術学校（現東京芸術大学）の出身の画家野見山暁治さんは、戦死した同級生の家族のもとに彼らの絵画を訪ねる取材を通して、「仲間たちの絵をこのまま見棄てておくわけにはいかない」との思いを募らせていました。1995年、それを知った窪島さんが野見山さんご遺族を訪ね、絵の収集と管理・保存の活動を始めたのが無言館建設の起りでした。

開館後、来館者の声が全国に広がり始めました。「あなたに見せたい絵がある」と。美術館に置かれている無言館日記には、  
— 涙で絵がみえません  
— いのちとは生きるとは  
    — どういうことなのでしょう  
— 愛が満ち溢れていました  
— 子供を誘ってもう一度来たい  
など感動の声で埋め尽くされています。何度も何度も訪れている方が多いこともこの美術館の特徴です。



金子孝信「姉の像」

孝信は出征の朝までアトリエで天の岩戸を題材にした大作を描きつづけていた。



小野春男「屏風絵 茄子」

大原美術館では、ゴッホのすばらしいのを見ることが出来た、非常に幸せでした。



山之井 龍朗「少女」

「兄さん、かならず帰ってきてくれよ。  
ふたりでりっぱな絵描きになるんだから。」  
兄弟ふたりとも還ってこなかった。



片桐 彰「街」

映画の筋書きは忘れてしまったけれど  
「オーケストラの少女」を見た帰り、  
戦争のことを考えながら2人で歩いた夜が  
忘れられません。



蜂谷 清「祖母の像」

ばあやん、わしもいつかは戦争にゆかねばならん  
そしたら、こうしてばあやんの絵もかけなくなる。

戦後60年。戦争を知る人はもう僅かになってしまいました。全国からこの美術館に行きたい、行きたいでも高齢になり遠くて行けないというたくさんの声を聞きました。現在、無言館に展示されている作品は80数点だけです。まだ展示されていない作品が300点近く残っています。こうした画学生の絵を見ていただきたいのです。

残された時間の中で、  
家族を、兄弟姉妹を、故郷を、自らを  
ただ、ただ一途に絵を描いて  
逝ってしまった若者がいたことを  
少しでも多くの方に  
知っていただきたいのです。

野見山暁治さんは語ります。  
「無言館は、美術館かどうかわかりません。美術館と  
言えば本当はいい絵を並べなければなりません。無  
言館にある絵はけっして上手な絵ではありません。  
しかし絵というのは、本当はこういうものじゃない  
かと私は思っています」  
「彼らと対話していただけたら幸いです」と。

いつかきっと、信州・上田市の無言館をぜひお訪  
ねください。

平成16年度

# 新収蔵品紹介

平成16年度に当館が収集した作品をご紹介します。  
16年度は購入12件、寄贈39件、合計51件の新収蔵品があり、これら以外に7件の寄託がありました。

※16年度の新収蔵品は、「所蔵品によるテーマ展」にて5月30日(月)まで展示しています。



まず購入作品のうち、「満林秋色」は近代京都画壇を代表する日本画家竹内栖鳳(1864~1942)の作品です。山里の秋を淡い色彩で情趣豊かに描き出した作品で、栖鳳73歳の筆になります。当館ではこれまで春草や大観といった、岡倉天心に影響を受けた日本美術院の画家たちの作品を収集してきました。栖鳳は、フェノロサや天心と深い関係があり、京都画壇の雄として横山大観と並び称され活躍した画家です。また栖鳳は今立の紙漉き師岩野平三郎に依頼して、自分好みの紙(栖鳳紙)を作っています。本作もその岩野平三郎

の漉いた紙に描かれた作品で、近代日本画と福井との関係を語る上で重要といえるでしょう。

また当館では開館以来、西洋版画を収集してきました。平成15年度末現在で約690件ある版画コレクションのうち、約8割が西洋版画です。今年度はパブロ・ピカソの「ランプの下の静物」と、フランシスコ・ゴヤの「諺(妄)シリーズ」を収集しました。

「ランプの下の静物」はピカソ81歳の作品で、長年彼の下でお手伝いさんとして働いてきたイネス・サッシェーへ贈ら

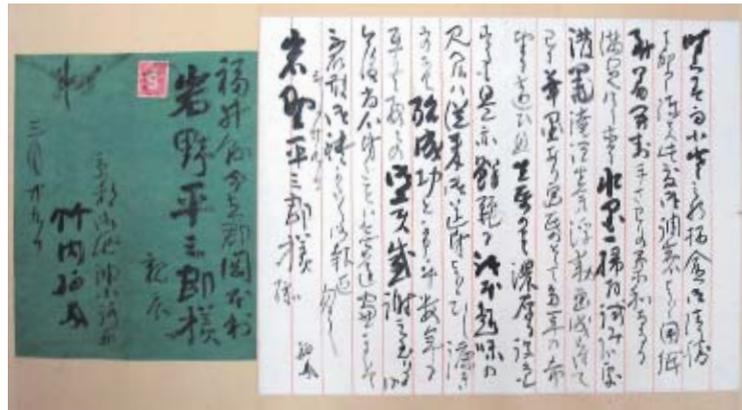
れたもので、多色刷りの技法が用いられた美しい作品といえます。一方ゴヤ(1746~1828)は、18世紀から19世紀にかけて活躍したスペインの代表的画家です。「諺(妄)シリーズ」は彼の四大版画シリーズのひとつで18枚からなり、西洋美術史の中でも最も重要な版画作品のひとつといえます。当館収集のものは初刷り300セットのうちのひとつで、刷りの状態が良好で大変貴重なものといえます。

一方、洋画では「東尋坊(海から見た)」が16年度の購入になります。作者の古沢岩美(1912~2000)は中央で活躍した



	a	f	g
b	c	h	i
d	e	j-1	j-2

- a : 竹内栖鳳「満林秋色」
- b : ピカソ「ランプの下の静物」
- c : ゴヤ「諺(妄)シリーズ」
- d : 古沢岩美「東尋坊」
- e : 北川健次「分光器 — Notre Dame de Chartres」
- f : 北大路魯山人「竹形花入」
- g : 加藤唐九郎「志野茶碗 銘苦屋」
- h : 楠部彌弌「彩埴八つ橋花瓶」
- i : 藤本能道「色絵かわせみ文磁器八角筥」
- j : 岩野家書簡等資料



シュール・レアリズムの洋画家として有名ですが、福井で新しい美術運動を展開していた「北荘画会」の招きで、1951年の夏に講習会の講師として来福しています。本作はこのとき福井で描いたスケッチを元に、後年油彩画にしたもので、同じく東尋坊や福井震災の跡を描いた油彩画や多数のデッサンの寄贈とともに収集しました。

北川健次は福井出身の版画家、オブジェ作家で、文筆家としても活躍しています。当館では彼の20代半ばの頃の版画作品を既に収蔵していますが、その後の多様な展開を跡付ける作品がなかったため、

今回この10年間に制作された代表的版画作品3セットと、オブジェ5点の計8点を収集しました。

以上の購入品のほかに、今年度は多数の寄贈品があります。なかでも敦賀市に本社を置く株式会社ジャクエツから寄贈された陶磁器20点は特筆されます。楠部彌弌、藤本能道、北大路魯山人、加藤唐九郎、富本憲吉、近藤悠三など、近・現代の重要な陶芸家の優品は見ごたえがあります。

さらに寄託品でも特筆すべきものがあります。それは横山大観や竹内栖鳳など近代日本画家を中心とする芸術家、文化人、

学者たちからの書簡等資料約850点です。これらの資料群は今立町で製紙業を営まれている岩野平三郎氏の所蔵で、平成9年に当館で開催された「和紙と日本画—岩野平三郎と近代日本画の巨匠たち」展に出品されたものです。日本画用紙に関して代々の平三郎との間で交わされたこれらの資料は、岩野家の紙が近代日本画の生成にいかに深く貢献したかを知ることのできる貴重な資料といえます。

# お知らせ

## <5月～7月の休館日について>

展示替え・燻蒸等のため、

5月16日(月)・23日(月)・31日(火)、6月1日(水)・13日(月)・20日(月)、7月4日(月)～15日(金)・25日(月)は休館とさせていただきますのでご了承下さい。

schedule

### 共催展・移動美術館展

7/16～8/ 7 ● 第36回 日展福井展

7/26～8/ 7 ● 移動美術館敦賀展 (会場:敦賀市・プラザ萬松)

### 貸館情報

4/29～5/ 2 ● 第21回 イーゼル会デッサン展

6/16～6/19 ● 第55回 県書道展・県現代書作家展

5/ 4～5/ 8 ● パレット・JIN絵画展

6/24～6/26 ● 第35回 若越書道会展

5/12～5/15 ● 第33回 書法研究石門展

6/29～7/ 3 ● 福井県写真作家連盟展

5/18～5/22 ● 春のひだまり

6/30～7/ 3 ● 第15回 木曜会書展

5/26～5/29 ● プレアデス会洋画展

● 第19回 白樺会洋画展

6/ 8～6/12 ● 第31回 福井県水墨画協会展

7/ 1～7/ 3 ● 第31回 福井県デザインコンクール作品展

6/ 9～6/12 ● JIA北陸支部会員作品展

● 創元会福井支部展

4/29～7/30

広報板

## 日本まんなか共和国

日本の東西文化の境界にある四県(岐阜、三重、滋賀、福井)が連携し、より効果的な文化活動を行うため、先進的な「日本まんなか共和国」の創造を目指しています。

### 滋賀県立近代美術館

大津市瀬田南大萱町1740-1 TEL:077-543-2111

#### 高田敬輔と小泉斐

4月23日(土)～5月29日(日)



高田敬輔「七福神図」宝暦2年(1752)

江戸中期の近江出身の画家、高田敬輔(たかた けいほ)と、その孫弟子にあたる下野国(栃木県)出身の小泉斐(こいずみ あやる)を中心に、江戸時代における画人たちのネットワークと、近江商人がそこに果たした役割を探る。

一般 900円(700円) / 高大生650円(500円) / 小中生450円(350円)  
※ 括弧内は、前売りおよび20名以上の団体料金

### 美術の20世紀

6月4日(土)～7月10日(日)



秋野不矩「(隧道)」

平成12年度の「日本画の情景」展に続く、静岡県立美術館との合同企画。日本画・洋画・工芸・現代美術など幅広いジャンルとユニークな見地から、複数の学芸員が、それぞれのコーナーを担当するかたちで20世紀美術のポイントを探る。

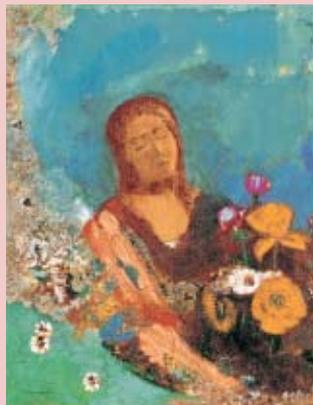
### 岐阜県美術館

岐阜市宇佐4-1-22 TEL:058-271-1313

#### 一帰ってきた私たちの名品展 岐阜県美術館で会える巨匠たち

ルドン、ルワール、玉堂から  
現代まで150選

4月1日(金)～5月8日(日)



オティロン・ルドン「眼をとして」

空調改修工事のため休館していた岐阜県美術館の5ヶ月ぶりの再オープンを記念した所蔵名品展。

一般 320円(260円) / 大学生 210円(160円) / 小中高生 無料  
※ 括弧内は、20名以上の団体料金

### 日本の美 三千年の輝き ニューヨーク・パーク・コレクション展

7月5日(火)～8月19日(金)

日本美術の大コレクションで知られるNYのパーク財団から、20年ぶりに130余点が帰郷する。埴輪、縄土器、仏画、絵巻、狩野派、琳派、広重など3000年にわたる日本美術の名品が展示される。

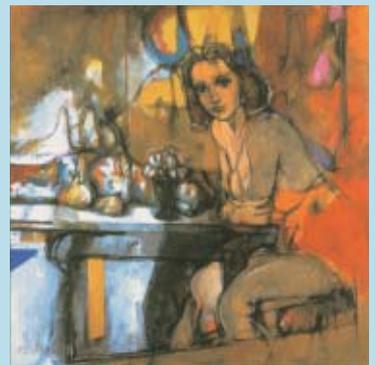
### 三重県立美術館

津市大谷町11 TEL:059-227-2100

#### 和田義彦展

4月9日(土)～6月12日(日)

和田義彦(1940～)は三重県出身の洋画家。イタリア、スペインなどに滞在して西洋古典絵画を研究し、そこから得た高度な絵画技術と的確なデッサン力、重厚な色彩感覚によって、現代社会と人間の内面にせまる独自の世界を提示している。本展では、初期から今日に至る代表作などを展示し、その画業を紹介する。



「赤い部屋」2004年

一般800円(600円) / 高大生600円(450円) / 小中生400円(250円)  
※ 括弧内は、20名以上の団体料金

### ジェームズ・アンソール展

6月18日(土)～7月24日(日)

わが国では「仮面の画家」としてファンが多い、ベルギー近代を代表する画家ジェームズ・アンソール(1860～1949)の芸術を、油彩画約50点、素描約40点、版画約60点によって紹介する。

一般1,000円(800円) / 高大生800円(600円) / 小中生500円(400円)  
※ 括弧内は、20名以上の団体料金